様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 １３ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１０１８４

研究課題名（和文）看護における「チームレジリエンス」の発揮過程－困難からの回復－

研究課題名（英文）The Process of Recovery by Resilience Expression in a General Ward Nursing Team Facing Difficulties

研究代表者
柏　美智（Kashiwa, Michi）

新潟大学・医歯学系・助教

研究者番号：５０７４７３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，困難に陥った一般病棟看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセスを記述することを目的とした．看護師経験が 6 か月以上で，一般病棟に勤務する常勤看護師 20 名を対象に半構造化面接を行った．修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法に基づき分析した．
困難に陥った一般病棟看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセスは，【混迷】の中でチームが粘り強く耐えて【模索】し始めることで，看護師個々の相互関係を【醸成】し，さらに チームとして【強化】することで，安心空間の創出という【変容】に至るプロセスをたどることが明らかとなった．

研究成果の学術的意義や社会的意義
国内外において，チームレジリエンスを時間的経過の中で捉えた先行研究は少なく，本研究において困難からのチームの回復をレジリエンス表出の過程として記述した点に意義があると言える．本研究ではチームを構成する個々の看護師の相互作用に注目しながら，チームが回復していく態様を時間的経過の中でレジリエンスの表出の過程として捉えることを試みた．それは，チームがたどる回復の見透しを考えることを可能にし，チームとしての現在の態様を確認するための道標になると考える．また，チームのレジリエンス表出による回復は，チームに属する個々の看護師のレジリエンス表出にも影響を与えると考えられ，看護管理の視点において寄与する．

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to describe the process of recovery by resilience expression in a general ward nursing team facing difficulties. We conducted semi-structured interviews with 20 full-time nurses who were working in general wards and had been working as nurses for at least 6 months, and then analyzed them based on the Modified Grounded Theory Approach.The process of recovery by resilience expression in a general ward nursing team facing difficulties was interpreted to involve [exploring] persistently through [confusion] to [nurture] the interactions between individual nurses to become further [stronger] as a team in order to arrive at a [transformation] in a newly created “safe space.”

研究分野：基礎看護学

キーワード：看護チーム　チームレジリエンス　困難　回復　相互作用

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

緊急性と正確性が要求される緊張に満ちた医療現場においては，看護業務は多忙を極め，常に医療事故の危険性を孕んでいる．また，看護師同士の人間関係や他職種との連携，患者と家族へのケアという点においても困難を生じる可能性があり，チーム内の相互関係の態様によっては，看護師の離職につながったり患者のケアの質が左右されることもある．このような困難に直面した看護チームが，困難に耐える抵抗性や弾力性を保って回復していくこと，すなわちレジリエンスを備えることは重要と思われる．レジリエンスとは，破損したり亀裂したりせずに跳ね返したり回復するというストレスに耐える物理的な物質の考え方に由来する概念であり，現在では，危機や困難からの「回復力もしくは復元力」として，個人や集団にも適用されている．近年は，チームのレジリエンスを時間的経過の中で捉えることの必要性が指摘されているが，困難に陥った看護チームが時間的経過の中でどのようにレジリエンスを表出して回復のプロセスをたどるのかについて言及した報告は見られない．看護チームがレジリエンスによって回復する態様に注目して，そのプロセスを記述することは，チームの困難からの回復への示唆を得て，患者ケアの質の維持および向上と，より良いチームづくりのために寄与すると考える．

２．研究の目的

困難に陥った一般病棟看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセスを記述することを目的とする．

３．研究の方法

（１）研究デザイン

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的記述的研究である．

（２）参加者

A 県内の単科病院を除く，100 床以上の病院の一般病棟の看護チームに属する，看護師経験が 6 か月以上ある常勤看護師とした．なお，新人看護師のインタビューについては，困難の振り返りによる精神的負担感軽減とチームを意識した職務実践の可能性を考慮し，就職後半年以上経過している者とした．また，チームが陥った困難の体験および，困難な状況からチームが回復したと思うような体験，それらの体験のプロセスの中で生じたチームの変化について，自由意思により話すことに同意した者を選定条件とした．

参加者依頼の際には，立場や経験による相違を含め，選定条件の範囲内で方向づけをしながら理論的サンプリングを行った．参加者の募集は，A 県内の一般病棟を有する病院の看護部宛てに参加者募集のポスター貼付を依頼するとともに，研究者の知人の看護師から参加者の条件に該当する看護師の紹介を受けた．

参加者は，役職に関係なくチームを構成するメンバーであり，看護師経験年数 11 か月から 38 年(平均 16 年)を有する男性 4 名，女性 16 名の合計 20 名であった．参加者の内訳は，役職やチームでの役割を担っていない看護師が 7 名，チームリーダーが 5 名，副看護師長が 2 名，主任看護師が 1 名，看護師長が 5 名であった．

（３）データ収集方法

１人１回，40～90 分（平均 60 分）の半構造化面接を実施した．質問項目は「個と個の関係」「個とチームの関係」に主軸を置き，以下の 4 点とした．

①チームの困難と困難に陥った際の自身およびチームの状況
②その状況に対する自身の認識
③困難からチームが回復するまでの過程とチームの変化
④チームが回復するために助けとなった資源

面接の実施においては，看護チームの困難な体験の語りを聴取することから，看護実践の評価や組織評価を目的とするものではないことを説明し，個人情報の保護とプライバシー保護への配慮を行った．

（４）分析方法

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法に基づいて分析した．分析焦点者は，「看護チームの困難からの回復を経験している一般病棟の看護師」とし，分析テーマは「困難に陥った看護チームが相互作用を通してチームのレジリエンスを表出しながら回復するプロセス」とした．分析テーマと分析焦点者に関連した具体例に着目し，その具体例が分析焦点者にとってどのような意味を持つのかを考え概念を命名した．他の類似例，対極例，概念間の関係を検討しながらカテゴリーを生成し，チーム回復のプロセスをストーリーラインとして記した．質的研究および修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの研究経験者から継続的にスーパービジョンを受けるとともに，作図およびストーリーラインを研究参加者にフィードバックして，分析結果

の信頼性と妥当性の確保に努めた.

４．研究成果

（１）困難に陥った一般病棟看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセスの記述

困難に陥った一般病棟看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセスは，38 の概念，16 のサブカテゴリー，【混迷】を始まりとする 5 カテゴリーによって説明することができた．このレジリエンス表出による回復のプロセスの始まりは，【混迷】という困難を抱えたチームの態様の表出であり，その契機となった出来事は，看護師のいじめ，患者や家族からの暴言・暴力，医師からの攻撃，新しい看護システムへの反対，看護ケアの不統一，離職したい雰囲気，連続的なインシデントの発生，医療事故による患者の生命危機であった．これらの出来事は複数が混在して語られた．分析の結果，看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセスは，【混迷】【模索】【醸成】【強化】【変容】の 5 局面をたどると解釈された．

【混迷】の局面は，個々の看護師の相互関係が緊迫し，チームとしての機能が失われかけた状態である．しかし，個々の看護師は粘り強く耐えてケアを継続する．

【模索】の局面は，混迷と停滞の中で，少しずつ頼り頼られる者としての相互関係を形成し始め，手探りしながらチーム回復への一歩を踏み出そうとする局面である．

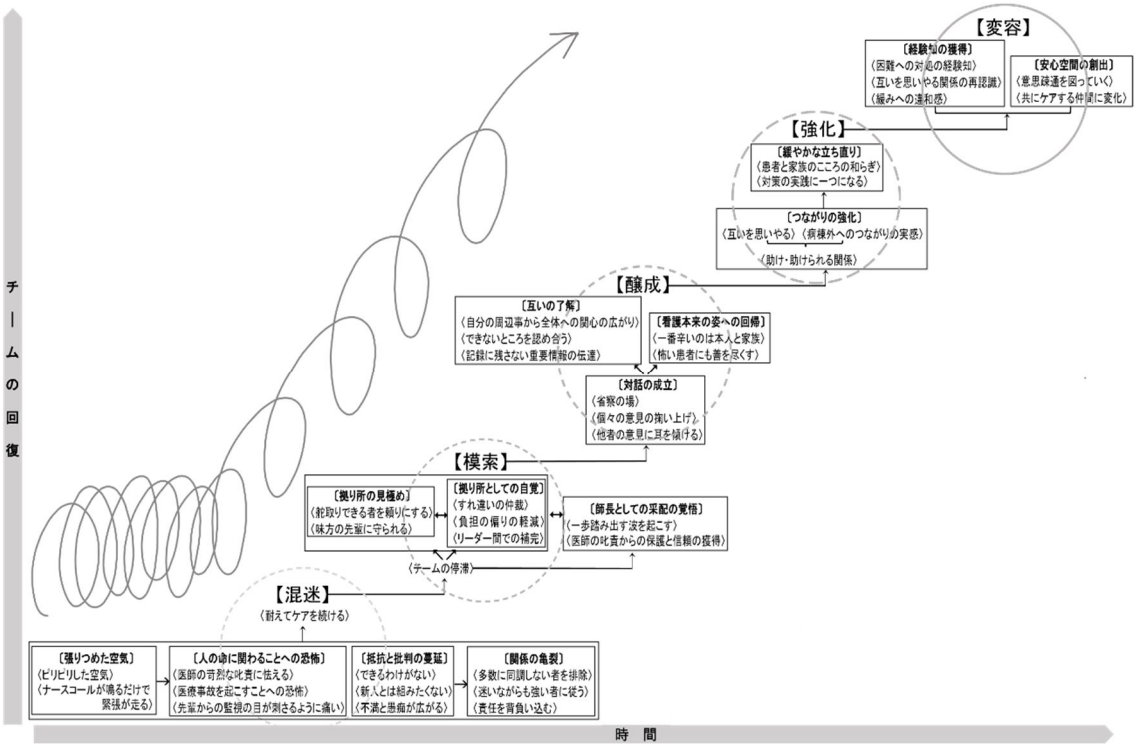
【醸成】の局面は，チームは相手の立場に立って考える柔和さを取り戻し，互いを認め合いながら，患者の看護を共に行うチームとしての態様を築いていく局面である．

【強化】の局面は，個々の看護師の関係が，共にチームを回復していこうとする意識の高まりのもとで，一つの力として凝集されていく局面である．回復に向けて立ち直りの態様を示す．

【変容】の局面は，チームとしての機能を回復し，目標達成のための協働・連携による日常を創るときであり，変化・成長したチームの態様が現れる局面である．

これら 5 局面は，時間的経過の中で一進一退という感覚を伴いながら，チームの適応的な相互作用を高めて螺旋を描くように回復していくプロセスとして表象された（図 1）．

困難に陥った一般病棟看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセスは，【混迷】を耐えて【模索】する中で，看護師個々の相互関係を【醸成】し，さらにチームとして【強化】することで，安心空間の創出という【変容】に至るプロセスをたどると解釈された．



【 】: カテゴリー　〔 〕: サブカテゴリー　〈 〉: 概念　→: 変化の方向　↔: 相互関係　円: チームの個々のつながりの状況　螺旋: チーム回復の進み方

図 1 看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセス

（2）看護チームのレジリエンス表出および回復に向けた示唆

看護チームがレジリエンスを表出しながら回復していくプロセスにおいて，チームが適応的な相互作用を高めながら変化・成長していく本結果は，チームにとって如何に人と人との関係が重要であるかを示している．困難に陥ったチームがチームとしての機能を失いかけながらも，耐えて力を蓄え，回復していくプロセスにおいては，とりわけ，【醸成】の局面における〔対話の成立〕が，その後のチームの回復につながる契機となる重要なレジリエンス表出の局面と考えられた．〔対話の成立〕から〔互いの了解〕を経験して個々の看護師がチームへの帰属意識を高めたとも言える．しかし，人と人との関係は一朝一夕に築かれるものではないため，日頃からチームの構成員が自由に発言しあえる土壌を作っておくことが重要である．

【模索】【醸成】の局面でみられたように，チームは経験の浅い者から中堅，経験豊かな者までを包含する構成によってチームとしての適応的な相互作用が働くと考えられた．看護チームにおける職位の違い，経験の違いという人材構成への配慮と多様性は，レジリエンスの表出に重要であると考える．また，〈省察の場〉〈個々の意見の掬い上げ〉は，チームを構成する個々の看護師が意見を述べ合いながら共に考えることの大切さを意味している．すなわち，チームがレジリエンスを高めながら回復するためには，困難の只中にある看護師や患者・家族という当事者の立場に配慮し，個人の責任に帰すことなくチーム全体で取り組むことが重要と示唆される．加えて，レジリエンス表出のプロセスにおける看護チームの〈病棟外へのつながりの実感〉は，チームが【強化】される局面であり，必要に応じて看護チーム以外の病院組織に支援を求める力が重要と示唆される．そのためにも柔軟に他組織や他職種に相談や協力を求められる開放的なチームであることが望まれる．

チーム回復の各局面を経て【変容】に至るプロセスは，チームにとっては経験知を獲得していくプロセスであるとも考えられ，看護師が感じた〈緩みへの違和感〉は，事故への予測にも似た経験知であり，それをチームの省察の機会と捉えなおすことが重要と言える．それは，経験知を獲得し，【変容】に至ったチームゆえに可能な省察であるとも思われる．そして，回復のプロセスで経験知を獲得していくことがさらにレジリエンスを高めることになると示唆される．

看護チームの相互作用および相互関係からチームのレジリエンス表出による回復のプロセスを明らかにした本成果は，個々の看護師の語りによる知見ではあるが，今まさに困難を経験しているチームにとっては，チームがたどる回復の見透しを考え，チームとしての現在の局面を確認するための道標になり，実践への応用が期待できると思われる．

（3）今後の展望

本研究では，看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセスと 5 局面における主要な要素を記述できたが，今後は，チームの回復に影響するレジリエンスの促進要因や停滞要因について明らかにすることが望まれる．また，本成果を看護チームのみならず，医療・福祉におけるチームにも応用できるよう，さらなる調査・検討を加え，応用可能性を拡げていきたい．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 柏 美智	４．巻 30
２．論文標題 困難に陥った一般病棟看護チームのレジリエンス表出による回復のプロセス	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本精神保健看護学会誌	６．最初と最後の頁 29～39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20719/japmhn.30.20-033	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 柏 美智
２．発表標題 一般病棟の看護チームが困難から回復するまでのチームレジリエンス
３．学会等名 日本看護科学学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

リーフレット「困難に陥った看護チームがレジリエンスを表出して回復するために」5000部作製　2021年12月 病院の看護師が参加する教育・研修の場や看護学生の教育の場などで活用

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関